

ジキよまんば!!

第1号

2013年
5月

みなさん、こんにちは。日ごろはお世話になりありがとうございます。このたびニュースレターを発行することになりました。紙面を通じて子どもの粘土づくりや日常を知っていただけたら幸いです。

このニュースレターは、これまでご注文いただいた方、サンプルをお送りしました方、名刺交換をさせていただいた方など、ご縁がありましたみなさまにお送りしております。必要ない方は、たいへんお手数ですがその旨をご連絡ください。※連絡先は裏に記載しております。

瀏野陶磁器原料の瀏野直幸です。これまでお会いしたことがある方も、はじめてこの顔をご覧になる方も、あらためましてよろしくお願い致します。

ここ佐賀県塩田町(現 嬉野市)で祖父の祖父が、やきものの粘土を作りはじめて以来120年以上になります。われわれも含め、この地で陶土業がはじまったのは明治から。豊臣秀吉の朝鮮出兵後、有田の泉山陶石で磁器が作られるようになります。その後、300年ほどが経ち、代わって天草陶石が有田焼の原料として使われるようになってからのことです。

伝統的な粘土の素は、陶石と呼ばれる石です。この石だけを用い、砕いて粉にし、水簸(すいひ)という工程を経て粘土を作ります。砕くのに使うのがキネとウスです。昔は水車が動力源でした。現在は電気でモーターを回して動かしますが、変わらぬこの製法がこの地域の特徴的なものとなっています。

私で5代目になります。小学生のころにはそのつもりでした。反発することなくすなりと。もの心ついた頃にはすでに「お前は後継ぎだ」と祖父母からは言われていましたし、中学生になると「東工大か名工大、どちらかの大学に行きなさい」と父は言っていました。

父自身が苦労した経験から「これからの時代、きちんとした知識・技術を身に付けた上での土づくりをしなければならない」と日ごろから口にしていました。結果として、その先見の明はすごく当たっていたと思います。

地元の普通高校を出て、名古屋工業大学へ進むことになるのですが、そこで当時先端のセラミックスの研究の場に身を置き、知識を身につけたこと、そしてそこでのつながりが今でもすごく役に立っています。

自分なりに学ぶ中でいろんなことがわかってきました。先人の知恵には驚くばかりです。昔ながらの伝統は守りつつ、そこだ

けに留まらず新しい分野に向けての挑戦もしていく、月並みですが伝統と革新の両立で事業を発展させるべく頑張っていきます。

Before



After



↑このキネとウスで陶石を砕きます

ケータイでQRコードを読み取れば楽々♪→

陶土屋さん 5代目社長のブログ

<http://blog.livedoor.jp/fuchinonaoyuki/>



ようこそお願いします！

テクノロジストの条件

ポンドラッカー(著)

まんがと図解でわかるドラッカーの藤屋伸二さんにはじめてお会いしたときに薦められて読んだ本です。サブタイトルがまたいい! 「ものづくりが文明をつくる」です。

単なる熟練工ではなく、理論と技能を身につけた者、それがテクノロジストだと。まさしくその通りで、そうでなければ成長はないと思うのです。

知識労働と肉体労働の両方を行うという点においては、わが社も当てはまります。これからの変革の時代を生きる中で、広く世界を見、さまざまなことに興味を持ち、知識と技術を習得し、辛抱強く創意工夫に努める大切さを再認識しました。

当てはまるといえば、これも。「専門外の者、特に科学技術に優れた感性をもち、知的好奇心が旺盛な専門外の者のほうが、みずからの知識の虜となりがちな専門家よりも優れた仕事を「条件」

テクノロジストの

条件



分の頭の固さを反省させられます。

オススメの1冊

会長さんの昔話

昭和の43年ごろまでは、うちでも水車が回っていました。水車を使う仕事であったため、このあたりでは陶土を作る仕事そのものを水車と呼んだり、陶土を作る工場のことを水車、またはクルマと呼んだりしていました。会社に行く、工場に行くとかではなく、水車に行く、クルマに行く、そう言ったりしていたのです。

当時使われていた水車は直径が5メートル前後、下掛けと呼ぶ車輪の下に水流をあてて回す形式のものでした。その水車を動力源に、キネを動かして石を砕き、クランクを回して水を汲み、ポンプを動かして泥漿を搾って陶土を作っていました。

ここ塩田の美野地区の水車は農業用の水路で且つ捨て溝と呼ばれる排水用の水路上にありました。農業用水ですから、稲作の時期は水田に水を引くことが優先順位の最上位です。ですから、捨て溝に流れる水は田んぼからあふれた分だけ。水車を回すのに十分な水量はありません。ということで、コメを作る季節には陶土を作ることができませんでした。

このような一年のうちの半分しか生産ができない陶土工場のことを「半グルマ」と呼んでいました。これに対して、一年中回すことができる水路に水車が設置されていた工場は「年グルマ」と呼ばれていました。

半グルマの人たちは、農閑期に陶土を作り、農繁期には稲を育てていました。そもそもは農家が農閑期に陶土を作るようになったのでしょう。美野地区の水車はみな半グルマで、近隣には20軒以上の陶土業を営む人がいて、水車は11台。うちも含めて多くは「もやい掛け」といわれる共用の水車でした。

しかしながら農繁期といえども需要はあります。雨の日なら水車を回せましたが、それだけでは到底注文に応えきれません。そこで、3代目の父は昭和27年にはじめてモーター駆動のキネを設置。以降、工場を拡張するたびにモーター駆動のキネを増設していき、10年足らずで一年中操業できる工場へと変えたのです。

現在の工場 すごく田舎です(笑)



じゃりんこミホの见ている風景



はじめまして。吉村美穂といいます。この会社のお客様とは、ほとんどお会いしたことがないので、このニュースレターやブログで、私や会社のことを少しでも身近に感じていただけると嬉しいです。よろしくお願いします(^o^)

私は、高校卒業後の昨年4月に入社し、今月で1年が経ちました。まわりを見渡すと、まだまだ知らないことだらけ…。その上、失敗の連続(〜;)

そんな私が新しく知ったこと。そして失敗談…などなど。分かりやすくお伝えできるように頑張ります!!

そして、プライベートな話も、書きたいと思いますが、それが多くなりすぎないように気をつけます(笑)

ちなみに、このコーナーの『じゃりんこミホ』という名前は、研修でお世話になった山崎隆弘事務所のスタッフの方から「じゃりんこチエに似てる!!」と言われたことがきっかけでした。なにそれ!?…調べてみると本当に私にそっくり!! ついタイトルにしちゃいました(笑)

📖 ブログも Check!! 📖

じゃりんこミホの见ている風景

<http://ameblo.jp/toudoyasan-jarinko/>



じゃりんこミホの社員さん紹介

他已紹介、的な。



じゃりんこミホこと吉村です。私目線での社員さん9名を3名ずつ紹介します。次回の社員さん紹介もお楽しみに!!

●重幸さん●



最年長59歳の重幸さん。私とちょうど40歳差! 来年の1月に定年を迎えられます。冗談ばかり言われるので、本気との境目が分からないことがよくあります。でも、工場の周りにいるカラスを手なずけているという噂は本当みたいです。

●荒木さん●



荒木さんが一番写真を撮られることが嫌いなようで、この写真は不意打ちの一枚です。(ナイスショット!!笑) 年齢を伺ったら私の父と同年!! でも、父と違って荒木さんの髪はフサフサでとても同じ歳には見えません!! (この写真では帽子を被ってらっしゃいますが。)

●古賀さん●



今年のホワイトデーに、嵐の大野くんがCMしているお菓子、チョコビスケをもらいました。(しかも全種類!!) え! 私が嵐好きなの知ってたんですか!?…もっと言うと、大野くんが好きな知ってたんですか!? とビックリ…。古賀さんは観察上手なのかもしれません!!

有限会社 洲野陶磁器原料

〒849-1426

佐賀県嬉野市塩田町大字五町田乙 287-1

TEL 0954-66-4207

FAX 0954-66-3747

E-mail info@fromform.jp

H P <http://www.fromform.jp>

